

Title	南インド・タミルナードゥ州・ダリットの太鼓文化「タップ」研究
Author(s)	黒川, 妙子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44128
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	黒川 妙子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17467 号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	南インド・タミルナードウ州・ダリットの太鼓文化「タップ」研究
論文審査委員	(主査) 教授 山口 修 (副査) 教授 根岸 一美 教授 天野 文雄

論文内容の要旨

本論文は、インド社会において千年以上ものあいだカースト制のもとで「不可触民」といわれてきたダリットの人びとによる太鼓文化「タップ」をとりあげ、近年目覚ましい展開を見せている表演(performance)の形態を分析しつつ、その変遷過程を牽引してきた社会環境と関連づけて論じる研究である。宗教的穢れが最も凝縮しているとされるダリットの人びとの太鼓タップは、葬儀に直結する楽器としてみなされ、根強くはびこるカースト社会により差別され蔑視されてきた。それゆえ、従来タップは正当な評価をうけることなく、「粗野で騒がしく価値の低い太鼓」としか理解されていなかった。しかし実際には、この太鼓はダリット社会内部で人びとの最も身近な楽器として、宗教儀礼や社会行事にも欠かせないものであった。本論文の目的は、誕生、成人、結婚、妊娠といった人生の節目に演奏され、寺の祭、情報の伝達にも供してきたこの楽器とその文化的意味を考察し、あわせて、近年における変遷の過程をたどりつつ社会的な認識も変わってきていることを明確に捉えることである。全体は、序章に続く全7章から成る。

序章「タップアットムとの出会い」では、研究の動機、対象、目的を正確に記述し、「タップ」という呼称を注意深く検討したうえで、フィールドワーク的調査方法と研究史の概略が示される。第1章「カースト差別における太鼓とその担い手」は、ダリットに対する社会的差別の状況を詳述したうえで、なぜ太鼓をたたくことが差別につながるのかを考察する導入部である。つづく第2章「ダリット社会のタップ文化の伝統」では、表演の場や目的、そこに秘められた文化的意味を論じる。さらに第3章「タップという楽器とその響き」において、楽器の分布、製作方法、表演における基本的なリズム、記憶や伝承に役立つ口太鼓などを記述する。

視点を変えた第4章「タップアットム成立にいたる社会的背景」では、タップが映画と結びつくことで一般大衆の人気を博するようになったこと、それに応じてプラスのイメージが浸透していったこと、また、ダリット解放運動の象徴として前面に打ち出されるようになっていったことが述べられる。また、第5章「タップアットムの舞台芸能化と表現技術」において、強化された舞踊的要素を図解して、いかに大衆の心をひきつける芸能へと変化したのかを論じる。

最後の2章で社会的な側面へさらに視点を変える。すなわち、第6章「タップアットムとダリット解放」では、社会改革を目指す人びとにとってはメッセージをこめる手段としてこの芸能が意義深いものとなっていることを指摘し、第7章「タップアットムの社会的役割と影響」では、メッセージを受けとめる側で生じたタップの意味づけの変化に触れて、タップのイメージがダリットを超え普遍化しつつあることを指摘する。論文を締めくくる「結び」は、

タップがタップアットムという新しい形態で普及したことが、音によるカースト支配を断ち切り、ひいてはカーストヒンドゥー社会全体にすら影響を及ぼした結果、カーストに分断されていた社会を少なくともその一端においてつなぐ役割を果たしたことが述べられる。

(分量 本文 120 頁 400 字詰原稿用紙換算約 375 枚 付録資料、参考文献、日英長短要旨等 65 頁)

論文審査の結果の要旨

人間の音楽性は、民族の違いや社会層の壁を超えて等しく認められ、現実の音楽様式や楽器遺産、そしてそれらの社会的文化的意味づけなどの点で相互に異なるだけなのである。人類の音楽遺産に関わるこうした普遍性と特定性を見事に物語る結果となっているのが本論文であると高く評価できる。社会人として長年にわたって幅広く国際的な文化政策の領域に関わったのちに入学して、改めて学業を修めた論者の人生の一端を飾るにふさわしい論文である。手法としても、タミル語学習、楽器や舞踊の実践、フィールドワークでの配慮あるインタビュー、緻密な文献調査と読解、そして音楽学、歴史学、文化人類学、社会学などの一般的動向への目配りが充分になされている。

しかし、あえて短所を挙げるならば、おそらく伝統の担い方や受けとめ方において性差による微妙な違いがあるに違いないので、そうしたジェンダー的視点が加えられてしかるべきだったように思われる。しかし、この短所は本論文に続く研究により徐々に補ってゆくことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。